

【研究ノート】

「神殿写本」前史

山崎保興

最後の死海写本と言われてその全容の解明が久しく待望されていた「神殿写本」が出版されたのは1977年のことである。筆者はその直前ともいべき1975年春から76年春まで、日本学術振興会派遣研究員としてイスラエル国ヘブライ大学考古学研究所に赴き、同研究所長 Yigael Yadin 教授に親しく接する機会を得たが、まことに迂闊ながらその時はじめてこの写本の存在を知り、既に早く1967年以来同教授自身の手によって巻物の開披・解読がすすめられ、しかも漸くそれが終りに近づいていることを知ったのであった。

いわゆる「死海写本」についてはもとより周知の事柄であり、わが国においても一時期一種のブームとも言うべき状況を呈していたこともあり、ましてや欧米の聖書学界における死海文書の研究はまことにめざましく、文字通り数え切れぬ程の著書論文が公刊されていたので、筆者自身も人並みにそれらのごく一部ではあるが一応の死海写本常識を身につける程度には読みかじっていたものであった。国内出版物としては幾つかの翻訳もの⁽¹⁾と共に専門研究書として日本聖書学研究所「死海文書——テキストの翻訳と解説」(山本書店、1963)が出されたが、その後ブームは去り、概ね'60年代を以て終りを告げたかのように感じられていた。筆者も生意気にも死海写本についてはもはやこれ以上知り得ることはないかの如く思い込み、これに関する話題は既に旧聞に属するものとして顧みなかつたことはまことに今省みて忸怩たるものがある。

筆者が再び死海写本に関心を抱いたのは、一つには甚だ単純なことながらエルサレムではじめてその実物を見たことにもよるが、これは一般観光旅行者でも必ず参観することになっている「本の殿堂」に展示してあるのだから別に特別なことではない。それよりも、前記イガエル・ヤ

ディン教授の部屋で直接「神殿写本」の断片を見せていただき、それが事実上最後の死海写本であり、在来発見解読されたものとは比較にならぬ程の分量と内容をもつものであることを知ってからである。但しエルサレム滞在中は専ら各地の発掘現場、就中「神殿山」周辺地区の発掘状況に関心を集中し、自分でも一時期直接それに携ったこともあって、毎日の読書も概ね、それらの発掘調査報告書の類いに限られており（もとより日々のヘブライ語学習を欠くことは出来なかったのであるが）、直接「死海写本」そのものについて学習する余裕はなく、いつの日かやがて完成するであろう「神殿写本」の解読・出版を心待ちするのみであった。

帰国後間もなく講談社が画期的な事業として「死海写本」のコピーを、容器の壺の造りも用紙の羊皮紙も、殆どクムラン出土のものと同様に作製・刊行(?)するということがあり、筆者も早速それを研究助成金で購入してわが大学図書館に納めた。それとセットになった解説書も内容的に勝れており、大いに担当の演習時間に役立てることが出来た。このようにして徐々に再び死海写本に関するイメージと知識情報を回復しつつあった時、たまたま東京での国際聖書学会に来日中のD・N・フリードマン教授をわが大学に招くという壮挙(?)があった。⁽²⁾これはさる同僚教授の示唆によって実現に漕ぎつけたものであるが、フリードマン氏のその時の講演は専ら当時世界中の話題となっていた「エブラの発掘」をめぐってのものであり、直接死海写本に言及されることはなかったが、同教授を送って千歳空港に向う車の中での話題は実に「神殿写本」についてのそれであった。氏はもとより現代世界における有数の聖書考古学者の一人であるから、当然と言えば当然であるが、ヤディン教授の解読作業を、彼の過去の数々の業績と共に「世紀の大事業」と評価し、一日も早くその完成が待たれる、と並々ならぬ関心を示していた。筆者がかってヤディンの下に学んだことを知って、「もう終わったのだろうか」と聞かれたが、その時はまだ何も情報を得ていなかったので「多分まだではないか」と答えるしかなかったが、その後間もなくヘブライ語版が刊行されたことを知ったのであった。その後ヤディンは自ら新政党を率いて政界入りし、やがてベギン連立内閣の副首相になってしまったので、かねて予告されていた英語版の出版は大幅に遅れていった。1978年夏エルサレムを再訪した筆者は、主目的はこの夏ヤディンの愛弟子として知

られるイーガル・シロ教授指揮下に開始されたばかりの「ダビデの町」再発掘調査の見学にあったが、併せてヤディン教授に再会できることを大いに期待して行ったことは言うまでもない。実質一週間足らずの短い滞在期間中に、一夜ランバン通りのヤディン邸を訪ねたところ、かつては自由に玄関ドアのベルを押すことが出来たものが、この度は門前で警備中の警官に阻止されて入ることが出来なかった。もっとも「教授は留守だ」というのがその理由であったが、その時私はそれを信用しなかった。後で考えれば、なる程この二年あまりの間に良き協力者であったヤディン夫人は心臓病で逝去し、令嬢は既に嫁がれたのであるから、ましてや政局多端の折柄あるいは留守は本当であったかもしれない。翌日スコプス山上の懐かしい大学キャンパスを訪れ、考古学研究所にヤディンの親友であり同志であるJ・アヴィラム事務局長を訪ね暫く歓談したが、彼がその時「ヤディンは政治に忙しすぎて全く本職はストップしている。一日も早く本来の考古学者に戻ってほしいものだ」とはき出すように言ったのが印象的でもあり気がかりであった。エルサレムを離れる日の朝ホテルからロッド空港に向かう途中、車を総理府に寄せて副総理室まで上っていったが、早朝にもかかわらずちょうど総理室でベギン首相と要談中との秘書の話で、こちらも飛行機の時間が気になるので心残りではあったが土産物と書き置きの手紙を託して立ち去ったのであった。(後刻空港で検問に引っかかり取調べを受けた際、ヤディンの名前を言ったら係官が総理府に電話を入れて問い合わせ、すぐ解放してくれた。直接会話は出来なかったものの電話の向うにその存在を感じ嬉しかったことを覚えている。)その後アテネに一週間滞在して帰国したらヤディン教授からの手紙が先に着いており、「英語版も間もなく出るはずだから」とのことであった。ヘブライ語版を入手しても筆者の力ではあまり役に立たないことはよく分っていたので、ひたすら英語版を待つほかはなかった。その「間もなく」がなかなか実現しないまま数年を経過し、筆者は図らずも働き慣れた北星学園大学を離れて東北地方の小都市に赴任することになるのだが、それからは「神殿写本」も「死海写本」もあらばこそ、およそ研究生活などというものとは縁遠い毎日が続いていたそのある朝、ふと新聞の死亡記事欄に黒線の添えられたY. ヤディンの活字を発見してしばし茫然とした。遂に再会の機を得ぬままヤディン教授は逝き、肝

心の英語版も届かなかった。'84年6月28日、やはり心臓麻痺であった。だが実は英語版はその急死の直前完成しており、翌年出版された。その情報を得た筆者は、できればエルサレムに赴いてヘブライ語版共々入手したいと考えたが、当面無理な仕業と諦め、英語版だけ書店を通じて手に入れた。発注から入手までにもずい分と時間がかかったが、その後がまただめで殆ど手つかずのまま札幌に持ち帰ることになってしまうのだが、人より何年も遅れて漸く今それを読み継いでいる次第である。以上少なからず個人的な述懐を挿んでしまったが、筆者の「死海写本」研究は今始めて本格的な出発点に立ったという気がしている。当初の心積りでは本格的に論文のかたちで「神殿写本論考」とし、かねて死海写本論議の中でかまびすしかったところのイエス時代史との関連の問題を考察したいと考えたのであるが、いささか資料不足、準備不足の感を免れず、考慮の末「研究ノート」のかたちをとり、種々の話題を自由に書き記したい気もちに忠実に従うこととした。何よりも「神殿写本」はその発見の経緯からして興味深く、しかもその背景は必然的に「死海写本」の世に出るに至る経過につながり、この間ヤディンの父スケニーク教授以来の親子二代にわたるこれらの写本との因縁は、それ自体まことに興味深々たるものがある。今回は主としてそれらの発見史・解説史そのものについてのみ関心を集中しつつ若干の報告を試みたい。もとより後日の本格的論考を期してのことである。

一写本発見の経緯一

「神殿写本」を入手するまでのいきさつについては生前折にふれてY. ヤディン自身が語りもし書きもしているので、ここで出所を明示してそれを紹介するなどということは無用の仕業かもしれないが、一応責任を明らかにする意味で主としてヤディン教授がある聖書考古学雑誌に寄稿したものを⁽⁴⁾を拠りどころとしてその概略を紹介することとしたい。

ついでながら同誌は全編ヤディン追悼特集号として編集されているので、その全生涯と業績をあらまし知ることが出来て便利である。刊行の時期から言ってこのヤディンの投稿文はこの種の最後のものと推定され、その意味からも感慨深い。

ところでわれわれは、ここで直ちに「神殿写本」をめぐる経緯に入る前に、どうしてもその前段階としての「死海写本」についてのそれに言

及しておかねばならない。と言っても、それが1947年春まだき死海西岸の一洞穴からベドゥイン族の少年によって偶然発見されてからの文字通り紆余曲折の物語は、既におびただしい数の印刷物によって語り尽くされていると言っても過言ではないので（さしあたりは前掲国内出版物参照）、ここでは極力詳述・重複を避けつつ主としてヤディンの父スケニーク教授に焦点を当てて大体の経過をたどってみたい。

さて、やがて後に全く思いがけなく世紀の古文書発見者として歴史的にその名を記憶されることとなるムハマッド・アズ・ジープ少年は発見した巻物を持ってベツレヘムの族長のところへ行くのだが、イスラム教徒の彼は巻物の文字がアラブ語ではないのを見てそれをシリア語と推定し、同じベツレヘムに住むシリア正教徒の古物商のところへ持って行かせた。彼は他の同業者と相談の上、巻物の一つをエルサレム旧市内にあるシリア正教会聖マルコ修道院に運び、それをサムエル大主教に見せた。同主教は巻物の言葉がヘブル語であることを理解したがそれが何の写本であるか分からなかった。ともかく購入の意志表示だけはしたがその時はそれきりで終わった。数週間後彼らは再び、今度は巻物五巻をかかえたベドゥインを伴って修院を訪れ、大主教はそれを全部買いとった。これがその年七月のことであったが、彼はこれらの巻物を当時エルサレムに在住の関係学者たちに見せ、また九月にはシリアのアンテオケまで出かけてシリア正教会総主教に相談したりして巻物の正体を知ることにも努めたが確かな手がかりは得られなかった。

この間、ヘブル大学考古学教授 Eliezer Sukenik はたまたまアメリカにいてこのことを知らなかったが、11月下旬帰国後のある日突然エルサレム旧市内のアルメニア人古物商から興奮した口調の電話を受けた。用件は会った上で直接話すと言う。当時はまだエルサレムは英国の委任統治下にあり、しかも英国政府は第二次大戦後のパレスチナの事態収拾に手を焼いて間もなく引き上げようとしており、以前からくすぶっていたアラブ人とユダヤ人との間の紛争がやがて火の手を上げようとしていた。イスラエル建国直前の緊迫した情勢下にあったエルサレムを英軍は鉄条網による分離帯を設けることによって辛うじて当面の管理体制を維持していた。11月25日、スケニークは鉄条網をはさんでくだんの古物商と対面、羊皮紙の一片と共に巻物発見の情報を始めて入手することになる。

11月29日、スケニークはかのXに案内されてベツレヘムに向う。Xとは彼自身手帳に記した符丁であり、後にヤディンも「神殿写本」入手に際してしばしばこの種の記号を用いた。英軍の許可を取りつけた上でのことではあったが、このベツレヘム行きは甚だ危険であった。この日、国連ではパレスチナ分割案が採択されてイスラエル建国が認められようとしており、アラブ側の反発は必至であり、そしてベツレヘムは今もそうであるようにアラブ人の町であった。スケニークは当時「ハガナ」と称するユダヤ人の秘密防衛組織の一員であった息子に相談した。後にヤディンはその時を回顧し、軍人の立場では反対、しかし考古学者としては行くべきだ。だが息子としては何も言えない、と答えたと言懐している。そして危険を冒してスケニークは出かけ、Xの知人であるベツレヘムの古物商の屋根裏でクムラン洞穴から運ばれてきたという壺を受けとり、注意深く巻物を取り出して読んだ。その日彼が持ち帰った二本の巻物が、後に判明する「イザヤ書」と「光の子と闇の子の戦い」(スケニーク自身の命名による)であった。そしてその翌日、最初のアラブ・イスラエル間の戦い、第一次中東戦争が始まったのである。

その後スケニークはふとしたことから他にも五巻の写本があることを知ってこれ入手したいと願ったが、戦況の進展と共にエルサレム旧市内に入ることは既に不可能となり、聖マルコ修道院にはもはや近づくこともできなかった。その後の経過は、それ自体あたかもサスペンス映画のひとつこまでもあるかのような場面をも含みつ砲煙弾雨の中を縫うようにして進展するのであるが、事態はあまりに入り組んでいて、それを簡潔に叙述することはとうてい筆者の手におえることでないので省略せざるを得ない。ともあれスケニークは、結局すべての努力が徒労に終わったことを悲しみつつ、ユダヤ人は貴重な遺産を失ったと思ひ込んだまま1953年に世を去ったのである。ところが、まことに事実は小説より奇なりという言葉通り、その後、日ならずしてそれが息子のヤディンの手によってイスラエルのものとなるのである。

当初サムエル大主教の手に入った五巻の巻物がどのようにしてイスラエルの手に帰することとなったかという、聖マルコ修道院そのものがアラブ軍とユダヤ軍の十字砲火の中に入ってしまふに及んでサムエルは戦火を避け巻物をかかえてエルサレムを脱出、アメリカ合衆国に向かっ

た。到着後彼は直ちに銀行の貸金庫の中に巻物を納め、その安全性を確保した後改めて買手を物色し始めるのだが、事は容易には運ばなかった。

これより先、1948年2月サムエル大主教は巻物の鑑定を東エルサレムのアメリカ・オリेंट研究所に依頼したが、所長ミラー・パロウズ博士は出張中であつたため、所長代理としてジョン・C・トレヴァー博士がこれを受け、同僚のブラウン博士と共にサムエルの了解の下に巻物の写真撮影を行い、その一部をジョンス・ホプキンス大学のウィリアム・F・オールブライト教授に送ると共に、パロウズ所長の帰任を待つて解読にとりかかった。そこで明らかにされたのが「イザヤ書写本」「宗規要覧」「ハバクク書註解」である。3月に入ってこれらのアメリカ人たちは相次いでエルサレムを離脱したが、パロウズ博士がまだハイファで帰国の船待ちをしていた4月半ば、彼がエルサレムから送つておいた死海写本に関する第一報がアメリカの新聞に掲載され、それを読んだスケニークが発見場所についての訂正の声明を発表するということがあつた。パロウズ自身はこの間の出来事をジェノアに寄港した時始めて知るのであるが、自分の談話が誤報されていたことに驚く同時に、サムエル大主教の入手したもの以外にも同種のものがあることを最初に知つたと言う。

(この前後の事情とその後世界中に巻き起こつた論争の経緯は先に掲げたパロウズの著書に詳細に記されているので以下省略。)スケニーク自身は同年9月始めて写本に関する著書を出版した(『メギロット・ゲヌゾット』)。スケニークの入手した「イザヤ書」はサムエルの「イザヤ書」と区別され、前者は『ヘブライ大学・イザヤ写本』後者は『聖マルコのイザヤ写本』と呼ばれるようになる。尚、先に触れた『光の子と闇の子』と併せて二巻の巻物の他に彼が同時にベツレヘムから持ち出したものに羊皮紙断片の束があり『聖歌集』と呼ばれる。尚これらの巻物に『死海写本』の呼称を与えたのもスケニークである。これと前後してパロウズ、トレヴァー、ブラウンリー等の論文が相次いで発表され、この古写本に対する関心は急速に高まって来ていた。こういう情勢を背景にサムエルは訪米し、在米シリア正教徒を問安しつつ、各地の博物館・美術館・図書館・研究所等で公開展示会を行いつつ写本売却の機会を求めたが得られず、遂に新聞広告を出すに至つた。1954年6月のことである。

その頃たまたまヤディンが講演旅行のため訪米中であつたが、その間

ニューヨークに足を止めた時一人のユダヤ人ジャーナリストが彼にその新聞(ウォール・ストリート・ジャーナル)を届けて広告欄の小さな一画を示した。それが前記サムエルの写本売却広告であったのである。ヤディンは即時内密に行動を起こした。彼は独立戦争中ハガナの作戦部長であり、戦後ハガナが改めてイスラエル国防軍となった時は、参謀総長であった。ロードス島での休戦会談には彼がイスラエル側を代表してアラブ側と折衝した経験もあり、この度も彼の動きは注意深く且迅速であった。直ちに匿名で購入の意志を伝え、二重の媒介者を通して売買交渉をすすめ、一方本国政府に打電して資金準備を依頼した。この間アラブ諸国、就中ヨルダン側にこの情報が洩れぬよう細心の注意を払った。既に早くヨルダン考古局は、領内の古物不法持ち出しの故を以てサムエルを告発し、またアメリカ側に抗議を申し込んでいた。ましてやそれが敵国側の手に渡るとなればどのような事態が起こるか計り知れなかったからである。かくして、イスラエルは1955年2月になって始めて写本を手に入れたことを公表した。サムエルはずっとアメリカにいたが、最後までその買手が誰であったかを知らなかった言う。

それから十年余の後、ヤディンは再び自らの手によって別の重要な巻物を選び出すことになる。場所はスケニークの場合と同じくベツレヘム、とある古物商の床下からであった。但しこの度は危険を冒してではなく、六日戦争時の占領軍としてベツレヘムに乗り込んだイスラエル国防軍の一将校にヤディンが指示して取り出させたのである。全長9メートルの羊皮紙の上に8.75メートルにわたって66欄に分けて記されたこの写本を、ヤディンは「神殿写本」(「神殿の巻物」)と名づけた。始めの方に神殿建設についての指示が記されていたからである。

ヤディンはこの最後の死海写本の存在を既に7年前から知っていた。1960年8月、彼はヴァージニアの聖職者と称する人物から一通の手紙を受け取った。重要な本物の死海写本について取引きを仲介出来る立場にあるとのことであった。間もなく次の手紙が届き、その巻物はほとんど完全に近い状態で保存されており、優に百万ドルの価値のあるもので、その所有者であるヨルダン人古物商がその真の価値を知っている、とあった。これに対してヤディンは、かつてオリジナル死海写本についてサムエルに支払った額との比較において適正価格ならば話しに応じても

よいと返事したところ、10月になってクムラン第11洞穴から出た詩篇の巻物の一片が見本に送られて来たが、それは明らかにエルサレムのロックフェラー研究所にあった巻物と同じものの一部であり、それがどうしてミスターZ（と符丁でヤディンは記するのだが）の手下にあるのか皆目見当がつかなかった。1961年5月、ミスターZは売りたいのは断片ではなくて完全な巻物の方だが売値は正真正銘10万ドルでよいと言って来た。ヤディンはすぐに接触したい旨返答したが、その後間もなく彼はサバティカルでロンドンに出かけた。すると8月になってZから、売買交渉の全権を当の古物商から委任されたが現物は幅9インチ、長さ15フィートから18フィートぐらいはある、と言って来た。そうしてその巻物の断片を同封してあったが、鑑定の結果それはまちがいに本物であることを即時確認することができたので、物件はまちがいに死海写本タイプの巻物に属するものであること、非常に勝れた筆写者によるものであることを書き送ったところ、間もなく返事が来て現在価格は75万ドルであると言う。ヤディンは怒り、ロンドンから直接アメリカに渡ってZと接触、何度かの折衝の末価格は13万ドルに落ち着いた。ヤディンは前金として10万ドルを払い、別にベツレヘムまでの旅費として1500ドルを与えた。当の古物商から契約書にサインをもらい、現物の受け渡しを行うために。ところが古物商は一向にサインしようとしないう。12月に入ってすぐ、Zは再び古物商との話し合いがつかないからと20万ドルへの値上げを言って来たがヤディンはこれに対して逆に10万ドルを主張し、交渉は翌年にもち越されて1月から2月にかけて再三話し合ったが折合わず、遂に1962年5月、Zが更に値上げを要求して来たのを最後に、この交渉は立ち消えとなった。

翌1963年から、ヤディンはかの有名なマサダの発掘にとりかかった。この作業は、考古学者ヤディンの名をいやが上にも高からしめる大事業であったが、この三年間終始彼の念頭を去らなかつたのは「もしや、新しい死海写本の発見がありはしないか」という一事であった。が、しかしこの点に関する限り収穫はゼロであった。ヤディンがマサダの発掘成果を概ねまとめ上げた頃、1967年6月、いわゆる六日戦争、即ち第三次中東戦争が始まり、そして終わった。イスラエル国防軍がエルサレム旧市とベツレヘムを占領するや否やヤディンは行動を起こした。くだんの

古物商は東エルサレムに店を持ち、ベツレヘムに住んでいたので事態は有利に展開するはずである。ヤディンは直ちに時の首相レヴィ・エシュコルに報告し、エシュコルは国防軍の情報将校をその為に派遣してくれた。その将校(中佐)はヤディンの意図を体してまづ古物商の店を訪れ、そこから彼を同道してベツレヘムの自宅に向かったが、そこでかの古物商は自らの家の床のタイルを数枚はがして、その下から靴箱に納めた巻物を取り出した。それともう一つ、引きちぎった写本断片を入れた煙草の箱も出てきた。やがて一年後、古物商に支払われた代金は、10万5000ドルであった。

“かくしてかの巻物入手の物語は終り、その開披の物語が始まった”とヤディンは書きしるしている。われわれもまたここから更にその解説の苦心談を追尾すべきところであるが、もはや紙数も予定に達しようとしているので、以下はまた次の機会にゆづりたい。「神殿写本」そのものの意義と価値については、冒頭に記した通り、いづれ近い将来において論考としてまとめるつもりである。

〔注〕

- (1) J. アレグロ、北沢義弘訳『死海の書』(みすず書房、1957)
 M. バロウズ、新見宏・加納政弘訳『死海写本』(山本書店、1961)
 M. ラペルーザ、野沢協訳『死海写本』(白水社、1962)
 M. ブラック、新見宏訳『死海写本とキリスト教の起源』(山本書店、1966)
 H・H・ローリー、関谷定夫訳編(ヨルダン社、1968)
- (2) この時の「国際聖書学シンポジウム」は日本旧約学会主催で1979年12月5日から7日まで東京・六本木の国際文化会館で行なわれ、世界各国から現代の代表的な旧約学者が参集した。前記D・N. フリードマンはその二日目の終わりに、「エブラと旧約聖書」と題する特別講演を行ったが、会期終了後直ちに空路来道し、釧路・帯広での会合を経て最後に本学に来訪されたものである。時あたかも待降節のさ中であり、講演の司会の任に当たった筆者がDavid・Noel・Freedmanという名前をもつ大家がこの時季に本学を訪れたことの意義を終りの感謝の言葉と共に述べたところ、後で大いにその思いつきを喜ばれたことも懐かしい思い出である。
- (3) 木田献一氏が神殿写本についての簡潔な紹介の中で「ヤディンがこの「神殿の巻物」を幾多の曲折の末、遂に手に入れることになったのも、

「神殿写本」前史

スケニーク教授以来の関係によるもので、決して単なる偶然ではない。”と特に付言しておられるのも故なしとしない。(自由国民社版『聖書の世界』総解説 1986年 巻末増補・その3「最近の二つの話題」—〈死海文書の最重要文書「神殿の巻物」の発行〉)

- (4) Biblical Archaeology Review (September/ October 1984 VOL. X. No. 5) Yigael Yadin (1917-1984) ON THE LATEST DEAD SEA SCROLL

参考文献

Yigael Yadin; The Temple Scroll, The Hidden Law of the Dead Sea Sect.